

見せてもらえないかな」

両手の指を開いたり閉じたりしながら、薫は上目遣いで二人を見た。

拓がスマレを見やると、彼女は、下がりそうになる唇の端を必死で上げているように見えた。
「まだ信じられないか」

「うん。さっきよりは少し気持ちが変わったけど、でも、見えないし……どんな人？」

拓はスマレの顔や姿について薫に説明した。

「オレンジがかったややロン毛の金髪で、青い目の美人だ。紫のグラデーション・白・レモンイエローのワンピースを着てる」

「そうなんだ。会ってみたいな。……会えなくても、やっぱり、ここにいて、自分の目で確かめたい。いい方法ないかな」

ゆっくりと噛みしめるように、薫は言った。

「無茶言うなよ。誰にでも見えたりしたらまずいから、見えねーようになってるかもしれないんだぞ。声だって同じことだ」

拓は手のひらで顔半分を覆った。

茜も、拓の耳をますます力を込めて握ったまま、頷いた。

——でも、疑いを持つことはいいことですよ、薫ちゃん。
スマレの明るい声に、三人ははっと顔を上げた。

——自分で考える、つてことですから。

スマレは笑いながら、こめかみを人差し指でつんつんしてみせた。

何ものにもひるまない芯しんの強さが、スマレのやわらかそうなオレンジしんがかった金髪や穏やかな微笑み、透き通るような白い肌に包まれているように拓には見えた。

——わたしの姿を直接お見せすることはできないですけど、ここにすることは、お見せできると思います。

「どうやって」

気が気でない拓に向かって、スマレは拳の上で親指を立て、にっこり笑った。そして、花壇かだんから水色と白という二色の花びらをもつビオラの花を一輪、萼がくの辺りから摘つみとった。

そのまま花を指でそっとつまみ、薫、拓、茜がいる近くの土の上にしゃがみ込む。

スマレはビオラの花を、さっと横に動かした。それから縦方向に、上から下にすべらせて最後ちよつと斜め下にやった。いったん手を止め、今度は右斜め上から下に花を動かし、「の」の字を書くように丸みを持たせて払った。

拓は思った。俺にはスマレも花も見えてるけど、薫と茜には、土に近い所の空中でビオラの花がひとりでに動いてるように見えるんだろうな……。

「糸とかついてないのに動いてる！ え、何これ……文字？」

薫がしゃがみ込んだので、拓も同じ姿勢をとらざるを得なかった。彼女の肩に置いた手や腕